

パスカルの『パンセ』草稿第 209 ページ、
217 ページにみられるテキストの加筆・訂正について
——断章「気晴らし」の生成研究 (2)：第 2 稿、「倦怠」の発見——

湊 野 正 満

要 旨

パスカルの『パンセ』に取められている断章「気晴らし」の草稿上に、筆者は三重のテキストの層が存在することを発見し、拙論「パスカルの『パンセ』草稿第 209 ページ、210 ページにみられるテキストの加筆・訂正について」において、その第一の層である初稿の存在を論証した。本稿ではその第二の層、すなわち第 2 稿について、明らかにしたい。第二の層は第一の層である初稿の結論部分をすべて放棄して、これを書き換え、人間の悲惨、気晴らしそして倦怠に関するあたらしい思索を生み出す。これは個人的な文章であった初稿をパスカルが生前企画中の「キリスト教護教論」のための文章へ進化させる試みでもあった。第三層である一番上の層では、彼はさらに加筆し、断章「気晴らし」の断章をあたらしい順序でまとめ上げようとする。

本稿は、第二層に特化して、断章「気晴らし」の草稿、第 209、217 ページを詳細に検討し、この段階で付け加えられたすべてのテキストを洗い出し、断章「気晴らし」の生成の秘密の解明の第 1 歩にしようとするものである。

キーワード：パスカル, Pascal；『パンセ』, Pensées；断章「気晴らし」, «Divertissement»；
自筆草稿, autograph manuscript；
複読法, «Double lecture» of M. Yoichi MAEDA (named by Pr. Jean Mesnard)；
多重複読法, «Pluri-lecture»

序 章

パスカルの『パンセ』断章の中でもとくに長く、思想的にも重要である断章「気晴らし」は、難解とされている。この原因の一つは、私見によれば、この断章の草稿が、未だ完全には読み解けていないことにある。

数年まえより、この草稿に取り組んでいるが、草稿を詳しく解析して、この断章の成立過程の全容がほぼ見えてきた。さいわい、数年前から京都産業大学の総合研究支援制度の助成金を受けることができ、ソルボンヌ大学のフィリップ・セリエ名誉教授の指導のもと、現在この草稿の成立過程の本格的解明にむけて取り組んでいる。

われわれの調査では、断章「気晴らし」の草稿（紙片 5 枚にわたり記載されている）には、大きく言って 3 層のテキストが重層的に重なり合って存在している。この 3 層のテキストの存在

は断章「気晴らし」が大きく3段階のステップを踏んで、今日多くの『パンセ』刊本にみられるような姿に発展したことを意味している。

2009年3月に公開した拙論「パスカルの『パンセ』草稿第209ページ、210ページに見られるテキストの修正・放棄について」において、草稿上の一番下にある層を掘り起こし、本断章の初稿の存在をあきらかにした。断章「気晴らし」は、もともと3枚の紙（R.O. pp. 139, 210, 209）のそれぞれ片面に綴られていたことがわかったのである。それを引き継ぐ本稿の目的は、2番目の層について解明することにある。

なお、小論中では、本断章全体がはじめて書かれた文章を「初稿」、本断章が1度目に大きく発展したものを「第2稿」と呼ぶことにする。この第2稿は、もう一度大きく発展するのであるが、これを「第3稿」と命名する。

一般にパスカルは繰り返し自分の文章を加筆訂正したことが知られている。また、彼自身も、そのことを自覚して、あとで加筆修正しやすいように、かなり、一定のやり方で草稿を書くようにしていたことも知られている（Yoichi MAEDA, *Le premier jet du fragment pascalien sur les deux Infinis*, in *Études de langue et littérature françaises*, No.4 白水社, 1964）。

断章「気晴らし」に即して言う、初稿成立後、パスカルが初稿を見直し、細かい字句の修正をしたあとが見られる。その後、大幅な加筆修正をはかり、第2稿が成立する。この第2稿も見直され小幅な修正が加えられる。その後、再び大幅な加筆修正が加えられ、かつ全体の構成も刷新され、第3稿が成立する。この第3稿にも細かな字句の修正などが加筆され、今日多くの『パンセ』刊本の中で見られる本文に到達するのである。

小論は、このような生成過程の第2稿について、明らかにしようと試みるものである。

まず、第2稿成立時に初稿に付け加えられたテキストを草稿上で洗い出す必要がある。パスカルはたとえ、付け足した文章であっても、その文章はかならず後で時間が経ってから見直し、加筆訂正したと思われる。このことは草稿上で第2稿で成立した文章についても、はじめに書いた状態（Le Premier jet¹⁾）が存在していることから、推定でき、これまで調べたほかの断章においても例外はなかった。

本断章の場合、パスカルは改訂するにあたり、初稿の結論部、初稿の約3分の1程度を削除し、削除した初稿のテキストとほぼ同じ趣旨の文章が、客観的な文体で書き記し、それにあたらしい思想を付け加えると言ったプロセスで第2稿をかきあげていったのである。

草稿上では第2稿にも加筆修正が加えられ、その後、第3稿に向けての大改訂もおこなわれているにもかかわらず、第2稿の Premier jet を発掘・再現することが可能なのである。

そこで本稿では、第2稿執筆時に初稿に付け加えられた部分について洗い出す。そのためには、第2稿で書き加えられたテキストの Premier jet ばかりか、草稿上に存在する、第2稿成立後に受ける加筆修正の跡をも理解していかなければならない。このメカニズムを有機的総合的

に理解してはじめて本断章のダイナミックな生成過程が理解できる。

したがって、小論では第1章から第4章までは、第2稿で追加されたテキストを検討する。第5章では、この大改訂の結果この断章がいかに変化したかに触れたいとおもう。

第1章 Texte 15

断章「気晴らし」の草稿第209ページには、何度も書き直された文章 (Texte15) が存在する。Texte15の内容がこのページの上部に書かれ放棄された文章 (texte 13, 14) とほぼ同じ構造を持っていることから、Texte 15がTexte 13と14を書き直したものであることをすでに解明した (拙論「パスカルの『パンセ』草稿第209ページ、210ページに見られるテキストの修正・放棄について」 in 京都産業大学論集, 人文科学系列第40号2009年3月発行参照)。パスカルは、改訂するにあたり、初稿結論部 (texte 13, 14) を削除することから始める。簡単にまとめると、パスカルは第209ページに書かれている初稿結論部最後の数語を横線で消し、そして、その数語を修正することなくそれらの語を含んでいる Texte 14すべてを、さらに Texte 13を縦線で放棄し、第210ページの最下部 Texte10も放棄することにして、その直前にある Texte 9最後尾に、送り記号 (Signe renvoyant) Aを付け、第209ページに戻り、今、放棄したばかりの Texte14の最後に、送り記号 A (Signe renvoyé) を書き加え、Texte 15を書き始める。

この手順は少し説明をしておきたい²⁾。というのは、第2稿に向けてのパスカルの作業を検証するために、このプロセスをもうすこし丁寧に説明する必要があるようだ。

次の2つの文 (Texte 14とTexte15前半) を比較してほしい。

Ainsi on se prend mal pour les blâmer; leur faute n'est pas en ce qu'ils recherchent le tumulte s'ils ne le cherchent que comme un divertissement; mais le mal est qu'ils ne le recherchent comme si la possession des choses qu'ils recherchent leur devoit rendre véritablement heureux Et c'est en quoy on a raison d'accuser leur recherche de vanité de sorte qu'en tout cela et ceux qui blâment et ceux qui sont blâmés n'entendent la véritable nature de l'homme.
(Texte 14)

Car, quand on leur reproche que ce qu'ils recherchent avec tant d'ardeur ne sauroit les satisfaire, s'ils ne le cherchent que comme un divertissement; mais le mal est qu'ils ne le recherchent comme si la possession des choses qu'ils recherchent leur devoit rendre véritablement heureux Et c'est en quoy on a raison d'accuser leur recherche de vanité de sorte qu'en tout cela et ceux qui blâment et ceux qui sont blâmés n'entendent la véritable nature de l'homme.
(Texte 15前半)

seront en suite dans Vn heureux repos Jls donnent (a)beau a se faire battre mais dans la uerité on ne combat que l objet Imaginé Et non pas celui qu Jls ont en effect Et qui se (s)Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur.

(Texte 15 前半)

全体として見ると、この2つの文は、同じことを少し見方を変えて言っているが、だからといって、2つの見方を両方紹介するほどの差異はなく、しかも、Texte 15 前半は Texte 14 を超えている。すなわち、筆者の見解では、この両方のテキストが同時にパスカルの同一の稿に混在することはありえない。

Texte 15 は、「Car」という接続詞ではじまっており、しかもこの「Car」は直前の単語 «l'homme» とともに、一つの線で放棄されている。この「Car」を書いた時点では、パスカルは Texte 14 の理由を書こうとして書き始めたのではないだろうか？これは推測であるが、パスカルがその理由として書き始めようとしていたものは、Texte 16 だったのでは、あるまいか。というのも、この Texte 16 のアイデアの萌芽は、書きかけてその時点ですぐに放棄してはいるが、すでに Texte 13 の最後に存在する。「Car」を書いた瞬間は、パスカルは Texte 14 の理由として Texte 16 を書くことを想定していたとしよう。ところが「Car」を書いてすぐに、その理由を説明すべき Texte 14 そのものを書き直す必要を感じ、長い縦線一本で Texte 14 を、横線で «l'homme. Car» を放棄する。そして Texte 14 を Texte 15 に書きなおしたのではないか。想像の域を出ないが、おそらく、パスカルは一気にこのページの最後まで書いてしまい、最後の行に見られる暫定的結論 « mais qu on Juge quel est ce bonheur qui consiste a estre diuert de penser a soy» まで到達してから、さかのぼってピュロスとキネアスのエピソードまでを放棄したのではないか。このように考えると、「l'homme. Car」を放棄する横線の太さとその上に書かれた «Et Ainsy» の加筆の太さが同じに見えるのも、「Et Ainsy」が行間に加筆されたことも説明がつきそうである。

すなわち、Texte 14 を長く太めの縦線を引くことにより消したために羽ペンの先が太くなり、「l'homme. Car」を消すための横線も太くなってしまった。「Et Ainsy」は Texte 17, 18 の書かれた後で記入されたことになり、前者の筆の太さは後者のテキストとおなじであり、比較的太い。行間に挿入された «Et Ainsy» の文字と «l'homme. Car」を消すための横線は隣接しており、この太さが近似しているのは上のような事情で、偶然の産物であるといえよう。

«Et Ainsy» は先の論文で述べたように、ピュロスとキネアスのエピソードとそれにまつわる話 (Texte 10, 13, 14) を放棄して Texte 9 の最後に送り出しの送り記号をかねて、「Et Ainsy A」と書き込み、Texte 15 の行頭に受けの送り記号 «A» そして行間に «Et Ainsy」と書き込んだと考えられる。

以上のようなプロセスを経て、第2稿へ向けての大改訂が始まるのである。そこで Texte 15 の検討から始めよう。

第1節 Texte 15のPremier jet

ところで、書き直されたTexte 15はさらに加筆、修正を加えられており、この部分の修正の順序については、これまで説明されてきていない。これを検討することから始めよう。この部分の全体的なイメージは草稿写真版およびその転写を参照してもらうことにして、ここでは、例によって前田方式で、本文を1行おきに読んでいくと、次のようなle premier jetが顔を表す。

le premier jet (texte 15)

[……] quand on leur reproche que ce qu Jls
 recherchent avec tant d ardeur ne scauroit les satisfaire, s Jls repondroyent comme Jls
 deuroyent le faire s Jls y pensoyent bien, qu Jls ne recherchent en cela qu Vne
 occupation (s)Violente et Impetueuse qui les detourne de penser a soy Et que c est
 p^r cela ou Jls se proposent Vn objet attirant qui les charme Et les attire avec
 [uiol] ardeur, Jls laisseroyent leurs aduersaires sans repartie mais en
 croyant comme Jls font qu Jls seront en suite dans Vn heureux repos Jls
 donnent (a)beau a se faire battre mais dans la uerité on ne combat que l objet
 [Jls] Imaginé [Et non pas leur] [auoir] Et non pas celuy qu Jls ont en effect
 Et qui se (s)Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur.

パスカルは8行目まではすらすらと筆をすすめるが、9行目になると逡巡した痕跡が見られる。8行目の「mais dans la uerité on ne combat que l objet」に対する説明を加えようといったんは、「lls imaginent」で文章を書き始めようとするが、そのとたん、前の行の「l objet」をそのまま修飾する表現を思いつき、いったん書いた「Jls」を横棒で放棄し、書きかけの「imagent」を「imagine」へと変更し、「l objet imagine」という表現に至りつく。

逡巡はさらにつづく。「Et non pas leur」、«auoir» を書いてはその場で放棄して、「Et non pas celuy qu Jls ont en effect Et qui se (s)Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur.» (下線筆者) を書くに至る。

特に最後の10行目の表現(下線部分)は注目すべきものである。この表現は、このあと2度にわたって場所を変え、磨かれていくのである。

一度目は、Texte 16中の「Vn projet confus qui les porte a tendre au repos」に加筆する際に、上部行間に若干変更して、「Vn projet confus qui se cache a leur ueue dans le fond de leur ame qui les porte a tendre au repos」(下線筆者)と加筆する。Texte 15に出てくる「qui se Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur」という表現は、第2稿に対する来るべき加筆修正時(第3稿に向けての改訂時)に放棄されるのであるが、この放棄の結果Texte 16で類似の表

現を加筆し得たのであろう。17 世紀フランスの古典主義的な文章美学では同じ表現を不用意に繰り返さないことが求められていたのである。

二度目は第 217 ページの Texte 25 のなかで使われる。Texte 25 は第 3 稿に向けての大改訂時にパスカルが全文を縦線で放棄し、この文章を 209 ページの左余白最下部に Texte23 として移して利用する。しかし Texte 25 が成立した時点では、断章「気晴らし」の第 2 稿はすでに完了しており、Texte 25 は関連文書としてパスカルが秘書に書き取らせたものであるから、成立の時点ではこの表現は断章「気晴らし」の文章とは別の断章中に存在することになる。

第 2 節 Texte 15 第 1 回修正

今度は Texte 15 への第一回目の加筆を見てみよう。

La Copie figurée (Texte 15, partie)

occupation (s)Violente et Impetueuse qui les detourne de penser a soy Et que c est

p^r cela ou Jls se proposent Vn objet attirant qui les charme Et les attire avec

un ardeur, Jls laisseroyent leurs aduersaires sans repartie mais en

croyant comme Jls font qu Jls seront en suite dans Vn heureux repos Jls

croient en effect que ce qu Jls cherchent est capable de les satisfaire Et

donnent (a)beau a se faire battre mais dans la uerité on ne combat que l objet

qu Jls

Jls s Imagin(é)ent Et non pas leur auoir Et non pas celui qu Jls ont en effect

Et qui se (s)Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur.

この書き換えは単純明快である。修正する対象は「en croyant comme Jls font qu Jls seront en suite dans Vn heureux repos Jls」である。まず次の行間に「*croient en effect que ce qu Jls cherchent est capable de les satisfaire Et*」と書き加え、その次の行「donnent beau a se faire battre …」に続ける。その行末の語「l objet」には、さらに次の行に修飾語「Imaginé」が続くが、これを書き換える。すなわち、行間冒頭に「*qu Jls*」だけを加筆し、もともとあった「Imaginé」を「s Imaginent」へと変更する。

これでこの一連の修正が終了する。この成果を見てみよう。

Le premier jet

Jls laisseroyent leurs aduersaires sans repartie mais
 en croyant comme Jls font qu Jls seront en suite dans Vn heureux repos Jls donnent beau
 a se faire battre mais dans la uerité on ne combat que l objet Imaginé Et non pas celui
 qu Jls ont en effect Et qui se Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur.
 (下線筆者)

La première retouche

Jls laisseroyent leurs aduersaires sans repartie mais
 Jls croyent en effect que ce qu Jls cherchent est capable de les satisfaire Et donnent beau a se faire
 battre mais dans la uerité on ne combat que l objet qu Jls s'Imaginent, Et non pas celui qu Jls
 ont en effect Et qui se Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur.

二つの文章の違いは、Premier jet で「Jls seront en suite dans Vn heureux repos」と表現して
 いたことを「*ce qu Jls cherchent est capable de les satisfaire*」と、より具体的な表現にしていたも
 のであり、また、フランス語としてあまり熟さぬ「l objet Imaginé」という表現を「l objet qu Jls s'
 Imaginent」へと書き換えることにより、フランス語らしい表現に代える。同時に「imaginer」す
 る主体を明らかにしたものであり、より現実に即した表現になっていった。とはいっても、こ
 の2つの文章のもつ趣旨の間に大きな違いはない。

第3節 Texte 15 第2回修正

第2回目の加筆・修正を見ていこう。この修正は2段階に行われる。

第1段階

[uiol] ardeur, Jls laisseroyent leurs aduersaires sans repartie mais ~~en~~
Jls ne repondent pas cela parce que Jls sont prompez eux mesmes Et qu Jls ont d'autres pensees Jls
 croyant comme Jls font qu Jls seront en suite dans Vn heureux repos Jls
croyent en effect que ce qu Jls cherchent est capable de les satisfaire Et
 donnent (a)beau a se faire battre mais dans la uerité on ne combat que l objet
 第1と2行目の行間に「*Jls ne repondent pas cela parce que Jls sont prompez eux mesmes Et qu*
Jls ont d'autres pensees Jls」の1行を付け加える。その結果「Jls laisseroyent leurs aduersaires
 sans repartie mais *Jls ne repondent pas cela parce que Jls sont prompez eux mesmes Et qu Jls ont*
d'autres pensees Jls croyent en effect que ce qu Jls cherchent est capable de les satisfaire Et
 donnent (a)beau a se faire battre [...]」と修正される。

第2段階

La deuxième retouche

occupation (s)Violente et Impetueuse qui les detourne de penser a soy Et que c est

p^r cela ou Jls se proposent Vn objet attirant qui les charme Et les attire avec

Jls ne se-

~~tiot~~ ardeur, Jls laisseroyent leurs aduersaires sans repartie mais en

Ils ne se repondent pas cela parce que Jls sont prompez eux mesmes Et qu Jls ont

[d'autres pensees Jls

croyant comme Jls font qu Jls seront en suite dans Vn heureux repos Jls

croient en effect que ce qu Jls cherchent est capable de les satisfaire Et

donnent (a)beau a se faire battre mais dans la uerité on ne combat que l objet

qu Jls-

Jls s Imagin (é)ent Et non pas leur auoir Et non pas celui qu Jls ont en effect

Et qui se Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur.

ne se connoissent pas eux mesmes, Jls ne sauent pas que ce n est que la Chasse Et non

[pas la prise qu Jls recherchent Jls ++

++ s imaginent qu s Jls

auoyent obtenu cette

charge Jls se reposeroient

ensuite avec plaisir

Et ne sentent pas que

la nature Jnsatiable de

la Cupidité, Jls croyent

chercher sincerem^t le

repos Et ne cherchent

en effect que l agitation

上の引用で「*Ils ne se repondent pas cela parce que Jls sont prompez eux mesmes Et qu Jls ont d'autres pensees Jls*」と、「*ne se connoissent pas eux mesmes, Jls ne sauent pas que ce n est que la Chasse Et non pas la prise qu Jls recherchent Jls ++*」は、印刷の都合上 2 行にまたがっているが、実は草稿上では 1 行に書かれているものである。また、「*++ s imaginent*」以下は、左欄外の余白に書かれている（写真版、転写版 Copie figurée 参照）。

この修正でパスカルは、上記引用 3 行目と 4 行目の行間に加筆された 1 行「*Jls ne repondent*

pas cela parce que Jls ~~sont prompez eux memes Et qu Jls ont d'autres pensees Jls~~ 後半を放棄し、さらに La première retouche で «Jls laisseroyent leurs aduersaires sans repartie mais» に加筆した文章をすべて放棄してしまう。この段階の修正は、以上をめぐるかなりおおきな加筆・修正であり、これがこの段階の主要な修正である。

パスカルはまず «Jls ne repondent pas cela parce que Jls sont prompez eux memes Et qu Jls ont d'autres pensees Jls» と加筆し、次の行間の «croient en effect que ce qu Jls cherchent est capable de les satisfaire Et donnent beau a se faire battre mais dans la uerité on ne combat que l objet qu Jls s'Imaginent, Et non pas celui qu Jls ont en effect Et qui se Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur.» といったんは繋げてみるが、«Jls sont prompez eux memes Et qu Jls ont d'autres pensees» は表現としてのエレガントさに欠ける。そこで、«Jls sont prompez eux memes Et qu Jls ont d'autres pensees» を横線で放棄して、1行上の余白に «Jls ne se (connoissent pas eux memes [...])» と書き出すが、おそらくは余白の狭さと加筆すべき文章のつながりゆえに、これをすぐに放棄する。そして、すでに放棄した、すなわち、書き換えの対象としている «Jls sont prompez eux memes Et qu Jls ont d'autres pensees Jls» に引き続く «croient en effect que ce qu Jls cherchent est capable de les satisfaire Et donnent beau a se faire battre mais dans la uerité on ne combat que l objet qu Jls s'Imaginent, Et non pas celui qu Jls ont en effect Et qui se Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur.» を放棄しながら、そのすぐ下の行の余白部分から加筆を始める。したがって «ne se connoissent pas eux memes, Jls ne sauent pas que ce n est que la Chasse Et non pas la prise qu Jls recherchent Jls ++» の一行は例外的に、この紙片の左余白から右端まで横断的に長く書かれるが、左余白から書き始めていることは、パスカルがこれから一定量の文章を書き込むことを予測していることを示しており、先に説明した «Jls ne se» を書いてすぐに放棄した理由を説明していると思われる。

さて、«[...] Jls recherchent Jls ++» の続きの文章を左欄外余白に texte 22 として書き込むことによってこの段階の修正を終了する。

この修正の結果を La première retouche と比較しながら、以下に引用する。

(La première retouche)

Jls laisseroyent leurs aduersaires sans repartie mais

Jls *croient en effect que ce qu Jls cherchent est capable de les satisfaire* Et donnent beau a se faire battre mais dans la uerité on ne combat que l objet *qu Jls s'Imaginent*, Et non pas celui qu Jls ont en effect Et qui se Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur.

(La deuxième retouche)

Jls laisseroyent leurs aduersaires sans repartie mais Jls ne repondent pas cela parce qu'Jls

ne se connoissent pas eux memes, Jls ne sauent pas que ce n est que la Chasse Et non pas la prise qu Jls recherchent. Jls s imaginent qu s Jls auoyent obtenu cette charge, Jls se reposeroyent ensuite avec plaisir Et ne sentent pas que la nature Jnsatiable de la Cupidité; Jls chercher sincerem^t le repos Et ne cherchent en effect que l agitation.

2つのテキストを比較すると、前者では「Jls croyent en effect que ce qu Jls cherchent est capable de les satisfaire Et donnent beau a se faire battre mais dans la uerité on ne combat que l objet qu Jls s'Imaginent, Et non pas celui qu Jls ont en effect Et qui se Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur」と具体的であったのに対し、後者ではこれを「Jls ne se connoissent pas eux memes」と一言で要約し、狩りの比喩で「Jls ne sauent pas que ce n est que la Chasse Et non pas la prise qu Jls recherchent」と説明する。そして、後者には前者にはない指摘「Cupidité」が加わり、次節で触れる「Ennui」とともに、「気晴らし」の思想に深まりと広がりを与えている。

第4節 texte 23 の加筆について

断章「気晴らし」の原稿第 209 ページ左余白最下段に加筆された 10 行程度の Texte 23 が存在する。ここでこのテキストについて触れておこう。本断章の成立過程を考える上で大事な加筆である。まず、余白のテキストを改行などを書かれたとおりに引用する。(この部分の全体的なイメージは草稿写真版およびその転写を参照のこと)

Texte 23 (Copie figurée)

Car

+++ ou l on pense aux

miseres qu on a ou à celles

qui nous menacent Et quand

on se uerroit mesme assez

a l abry de toutes parts l ennuy

de son autorité priuée ne

laisseroit pas de sortir du fond du

Cœur ou Jl a des racines

naturelles, Et de remplir l esprit

de son Venin.

この加筆を考える上で次の2つの指摘をしていこう。

- ① Texte 23 には前節で扱った Texte15 と類似の表現が見られる。

② Texte 23 には、断章「気晴らし」の原稿第 217 ページの Texte 25 と全くと言っていいほど、類似の文章が見られる。

a) Texte 23 と Texte15 の類似の表現

Texte 23 の中に見られる表現 « *(l ennuy de son autorité priuée ne laisseroit pas de sortir) du fond du Cœur* » は、Texte15 の Premier jet に存在するが、Texte15 にある類似表現はのちになってすべて放棄されてしまう。まずは問題の文章を引用してみよう。

... mais dans la uerité on ne combat que l objet

[Jls] Imaginé [Et non pas leur] [auoir] Et non pas celui qu Jls ont en effect

Et qui se (s)Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur. (Texte 15)

両者を比較すると逐語的には «*du fond du Cœur*» と «*dans le fond de leur Cœur*» の類似が指摘できる程度であるが、イメージについて比較すると、Texte15 の «*celuy qu Jls ont en effect Et qui se (s)Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur.*» は、人の心の奥底に潜んでいるという状態を表現しただけに留まっているのに対し、«*l ennuy de son autorité priuée ne laisseroit pas de sortir du fond du Cœur ou Jl a des racines naturelles, Et de remplir l esprit de son Venin.*» (Texte 23) は、じっと留まっていることが出来ず、人の心を毒で満たしていくという、いわば能動性が付与されている。いうまでもなく、後者にはパスカルの卓越した比喩表現を見て取る事が出来る。

パスカルは Texte15 の «*celuy qu Jls ont en effect Et qui se (s)Cache Et se derobe a leur Veüe dans le fond de leur Cœur.*» を、Texte 23 の «*l ennuy de son autorité priuée ne laisseroit pas de sortir du fond du Cœur ou Jl a des racines naturelles, Et de remplir l esprit de son Venin.*» に書き換えたというのは言い過ぎかもしれない。しかしながら、少なくとも前者の簡単な静的比喩表現を利用して、後者の能動的で動きのある秀逸な比喩表現に到達したとは言ってもいいであろう。なお、Texte 23 の成立時期について結論を先取りして言うと、第 3 稿執筆時である。

b) Texte 23 と Texte 25 にみられる同じ文章

Texte 23 は、断章「気晴らし」の原稿第 217 ページの Texte 25 と類似の文章であることを見てみよう。

まず、Texte25 を引用しておこう。この部分の全体的なイメージは草稿写真版およびその転写

を参照していただくとして、以下にこの部分の草稿の状態を記しておく。

Texte25 Le diuertissement est vne chose si necessaire aus gens du monde

Sans {ou ils pansent} tantost un accident leur arriue tantost

Qu'ils sont miserables {en} cela {car quant mesmes ils ne panseroient pas aus}
a [ux] ceux qui leur pouuent arriuer

Ils pensent {Miseres de leurs Conditions} {ou ce qui les porte dans l'ennuy} ou mesmes

quant ils n y panseroient pas Et qu'ils n auroit aucun suiect de chagrin

L'ennuy de son authorité priuée ne laisse pas de sortir du fonds du cœur

tout

[C] ou il a vne racine naturelle et remplir l'esprit de son venin.

ここでも、一行おきに読んでいくとこのテキストの premier jet が、姿を現す。この Premier jet は Tourneur (1942) も言っているように、パスカル専属の秘書によって書き取られたものである (dicté au secrétaire assidu, p. 211)。第 1 行目と第 2 行目そしてその行間に注目しよう。まず、専属の秘書は次のように書き取っている。

Le diuertissement est vne chose si necessaire aus gens du monde

Qu'ils sont miserables en cela (下線筆者)

ところで、パスカルが見直して «en» を横線で消し、上部行間に «sans» と訂正している。これは明らかに書き取った秘書の聞き間違いである。「sans」の冒頭の子音を聞き落とした結果である。ところで、このことはこのテキストが口述筆記されたもので、すでに紙片に書かれていたものを写したものではないということを意味している³⁾。もし紙片に書かれていたものを写していればおこらない書き違いであるから。

そこで、以下にこの部分の Premier jet を再現するにあたり、この聞き間違いは訂正して示す。

Texte 25 (Premier jet)

Le diuertissement est vne chose si necessaire aus gens du monde

Qu'ils sont miserables sans cela car quant mesmes ils ne panseroient pas aus

Miseres de leurs Conditions ou ce qui les porte dans l'ennuy ou mesmes

quant ils n y panseroient pas Et qu'ils n auroit aucun suiect de chagrin

L'ennuy de son aucthorité priuée ne laisse pas de sortir du fonds du cœur
ou il a vne racine naturelle et remplir l'esprit de son venin.

ところで専属の秘書は同じ行間に次のように書き込んでいる。

Le diuertissement est vne chose si necessaire aus gens du monde

ou ils pansent

Qu'ils sont miserables en cela car quant mesmes ils ne panseroient pas aus

ここでは、「*ou ils pansent*」は文法的に完成されていない状態であり、しかも横線で消されている。したがって「*ou ils pansent*」は、いったんはパスカルの指示である文章が記され始めたが、すぐにその変更は途中で中止された。

このことは、口述筆記させる場合に当然のこととして、次のようなことを証拠立ててはいないだろうか。すなわちパスカルは自分が口頭で述べて書き取らせた文を朗読させ、確認をしていた⁴⁾。もっとも、先ほどの「en」／「sans」は聞き漏らしてしまったのであろう。

さて、パスカルははじめに書き取らせた文章を自身で修正している。
修正後の文章を次に引いておこう。

Le diuertissement est vne chose si necessaire aus gens du monde

Qu'ils sont miserables Sans cela, tantost un accident leur arriue tantost

Jls pensent a [ux] ceux qui leur pouuent arriuer ou mesmes

quant ils n y panseroient pas Et qu'ils n auroit aucun suiect de chagrin

L'ennuy de son aucthorité priuée ne laisse pas de sortir du fonds du cœur

ou il a vne racine naturelle et remplir *tout* l'esprit de son venin. (Texte 25)

パスカルはせっきやくここまで修正したこの文章全体を長い斜線5本で一気に放棄している。この Texte 25 を前ページの左下余白に Texte 23 として書き写すことによって、断章「気晴らし」全体の中に組み入れるためである。しかしここでも、ただ書き写すのではなく、上の文章の前半を修正しながら写していく。パスカルによって変更された部分をイタリックで示しながらもう一度 Texte 23 を引用しておこう。

Car ou l on pense aux miseres qu on a ou à celles qui nous menacent Et quand on se ueroit mesme assez a l abry de toutes parts, l ennuy de son aucthorité priuée ne laisseroit pas de sortir

du fond du Cœur ou JI a des racines naturelles, Et *de* remplir l esprit de son Venin. (Texte 23)

文章を加筆・修正した跡のある Texte25 が Texte23 よりも先に成立していた。

結論を言えば, texte 15, Texte25 はパスカルが行った第 1 回目の大改訂時 (第 2 稿執筆時) に成立し, その後, この改訂版が練り上げられ, さらに第 2 回目の大改訂時 (第 3 稿成立時) に Texte 25 は放棄され Texte23 として移された。texte 15, 23, 25 は, 15, 25, 23 の順に成立していったのは明らかである。

第 2 章 Texte 16 について

パスカルは Texte 15 で指摘した人間の行う矛盾した行為の理由 (Raison des effets) を Texte 16 において明らかにする。まず, Texte 16 の Premier jet を示そう。

第 1 節 le premier jet du texte 16

car Jls ont Vn Jn instinct secret qui les porte a Chercher le diuertissem^t.
Et l occupation au dehors, [Et comme s Jls ont] qui uient du ressentim^t de leurs
miseres continuelles Et Jls ont Vn autre Jn instinct secret qui leur fait
connoistre que le bonheur n est que dans le repos Et non pas dans
[la recherche] le tumulte, Et de ces deux Jn instincts contraires jls se
forme en eux (le)Vn [r] projet confus qui les porte a tendre au repos
par l agitation, Et a se figurer toujours que la satisfaction qu Jls
n ont point leur arriuera si apres auoir surmonté quelques difficultez
qu Jls (s)Enuisagent Jls peuuent s ouuir par la la porte au repos.

断章「気晴らし」の初稿の Texte 13 (209 ページ) を見ると, 書かれてすぐに消された文法的に未完の一文がある。

ce n est pas qu Jls n ayent Vn Jn instinct [qui les] qui leur fait connoistre que le Vraye beatitude ...

書きかけられて途中で放棄されたこの一文でパスカルが書きたかったこと, これが, texte 16 の内容であると筆者は考えている。

Texte 16 の Premier jet では, 問題の人間の矛盾した行為は, 人間の本能によって説明されている。すなわち超自然に対する自然の範囲で説明されている。ところが, このテキストはその

後若干の修正を受ける。

引用3行目冒頭の«*miseres continuelles*»にアダムの墮罪以降の人間の本性を示す«*de la nature corrompue*»を付け足す。しかもこの語句は第2写本にあるタイトル«*La nature est corrompue*»をも思い出させる。ただし、この加筆«*de la nature corrompue*»は横線で放棄される。おそらくはこの修正と対をなす次の修正と両方残しては表現が間延びする、ないしは、分かり切った対句表現はエレガントでないという理由から、次に扱う修正を生かして、こちらを放棄したと思われる。

同じ行の«*Vn autre Instinct secret*»には、行間に2段の加筆が加えられる。このことは『パンセ』草稿では比較的珍しい。草稿をその部分だけ以下に転写しよう。

grandeur de nostre premiere

[*que*] *qui reste de la nature { saine }*

Vn autre Instinct secret qui leur fait

この部分の修正はアダムの墮罪以前の人間にまつわる加筆で前の加筆と対をなすものである。Premier jetでは«*Vn autre Instinct secret qui leur fait connoistre que le bonheur n est que dans le repos Et non pas dans le tumulte*»(下線筆者)と記していたが、この«*secret*»の意味を明確にすべく、関係代名詞節を付け加えることにし、まず«*que*»で始めようとしたが、すぐに«*qui*»で始めることにして、«*qui reste de la nature saine*»

とするも、«*saine*»の意味をさらに分かり易くすることにして«*saine*»を横線で消して、«*qui reste de la grandeur de nostre premiere nature*»と変更した。すなわち、この修正を経て、問題の人間の矛盾した行為にたいする説明は、超自然の、すなわち、宗教的色彩が表に出てくる。

次の補筆では、«*en effet*»が追加される(«*le bonheur n est en effet que dans le repos Et non pas dans le tumulte*»)。

次の補筆では«*Vn projet confus*»の上の行間に«*qui se cache a leur ueue dans le fond de leur ame*»を追加している。パスカルはすでに類似の表現を5、6行上で使っている。「*Et qui se Cache Et se derobe a leur Vetie dans le fond de leur Cœur*»(下線筆者)。後者はこの部分のPremier jetが書かれた時に成立し、後になって書き換えのため、放棄されたテキストである。同じような表現が繰り返し登場するのは避け、2度目は別の言い方に書き換えるのがよいとする古典主義的な文章作法から言って、この書き換えによる後者の放棄とそこで放棄した表現を前者の加筆に生かしたと考えることは、すなわち、後者の放棄と前者の成立は同じ時期と考えることが出来そ

うである。

つぎに行われる修正は «apres avoir surmonté quelques difficultez qu Jls Enuisagent Jls peuuent s ouvrir par la la porte au repos.» の部分に関して, «apres avoir surmonté quelques difficultez» を «*en surmontant* quelques difficultez» とスピードのある表現に書き換えている。

以上検討してきた修正を受けた後の Texte 16 を以下に記そう。修正で新たに加わった部分は斜体で示す。

Jls ont Vn Instinct secret qui les porte a Chercher le diuertissement . Et l occupation au dehors, qui uient du ressentim^t de leurs miseres continuelles Et Jls ont Vn autre Instinct secret *qui reste de la grandeur de nostre premiere nature* qui leur fait connoistre que le bonheur n est *en effect* que dans le repos Et non pas dans le tumulte, Et de ces deux Instincts contraires jls se forme en eux Vn projet confus *qui se cache a leur ueue dans le fond de leur ame* qui les porte a tendre au repos par l agitation, Et a se figurer toujours que la satisfaction qu Jls n ont point leur arriuera si *en surmontant* quelques difficultez qu Jls Enuisagent Jls peuuent s ouvrir par la la porte au repos.

加筆前に説明原理として使用されていたのは人間の本能であったが、加筆後は原罪によって説明され、宗教色がはっきりと顔をあらわした。

第 3 章 Texte17, 18, 24 第 2 稿の 2 つの結句

Texte17, 18, 24 については、ページを跨いで一括で扱う。

第 1 節 Texte 17

Texte 17 を引用しよう。

Ainsy s ecoule (d)toutes la uie, on cherche le repos en combattant quelques obstacles Et si on les a surmontez le repos deuiet Jnsuportable [Et] par l ennuy qu JI engendre, JI en faut sortir Et mandier le tumulte

ここはほとんど加筆も修正もない。しかし、まったく問題がないわけではない。添付の草稿写真版を参照して、この紙片の右端を上から下まで見てほしい。各行の最後の文字の終端部分

が紙より飛び出しており、これは、明らかに右端が切り落とされてた結果である。これはもちろんパスカルが切ったわけではないと思う。パスカルの死後、たくさんの断片の状態で残されていた『パンセ』断章が散逸するのをおそれて、遺族がアルバムに貼らせたのである。その時にカットされたと思われる。その結果、Texte 17の右欄外に無くてはならない送り記号、それも放棄された送り記号BとTexte 23の先頭にある+++が欠落した可能性がある。このことは重要な点を示唆している。これについては後で述べる。

また、パスカルによって訂正はされているが、次のTexte 18を縦線群で放棄した際、Texte 17の最終行まで誤って縦棒が上に伸びすぎているものが2本ある。写真版を見ていただければわかることであるが、これは、誤って長すぎた2本が先に引かれ、これを訂正するために上に伸びすぎた部分だけ、クルクルと訂正の印を付け、さらに分かり易いように今度は注意深く、縦線の頭を遠慮がちにそろえて正しく引き直し、間違えの無いようにしている。

第2節 Texte 18

ここでTexte 18を引用しよう。

[Nous] { Nulle Condition n est heureuse sans bruit Et sans diuertissem^t Et }
 { toute Condition est heureuse tandis qu on (a)Jouit de quelque diuertissem^t }
 ———
 mais qu on Juge quel est ce bonheur qui consiste a estre diuertit de penser a soy

Texte 18は3行、2つの文から構成されているが、はじめの2行は横線で放棄されている。これに対し、3行目の1文は、上の2行とともに、多数の縦線で一気に消去されている。これは、まず、上2行を横線で放棄し、その後、3行をすべて放棄することにしたことを表している。

またこの2つの文は、行頭の横線で、はっきりと分けられている。パスカルは時々この短い線を使用する。これには、線の上の文と下の文を分けるという程度の意味をみる方がよいと思われる。すなわち、多くの草稿紙片で断章と断章を分ける（すなわち異なる思想の断片を分ける）ために使用しているが、別のところでは、パラグラフの切れ目を示すために使用（断章『賭』の草稿参照）している。ちなみに断章「気晴らし」の草稿5枚に限って言っても、両方に使われている（p.4では前者、p.5では後者）。当該箇所では後者と考えるべきである。

この放棄された3行は短い文章であるが、横線で放棄された上2行は、幸福がわれわれの身分に関係するのでは無く、「気晴らし」の問題なのであることを指摘し、最後の1行は自分自身のことを考えることから気をそらすことに依存している人間の幸福とはどんなものか考えてみるがよい！と人間の悲惨を読み手に強く意識させるのである。

この放棄の意味はあとで論ずることにしよう。

第 3 節 Texte 24

Texte 24 を論じるにあたり, これが記されている断章「気晴らし」の草稿第 217 ページについてまず述べたい。

a) 草稿第 217 ページ

第 1 に Texte 24 の記載されている紙は, 上部が切り取られており, 断章「気晴らし」の他の 4 枚の紙とサイズが違う。この切り取られた紙片の上部はさらに 3 分割され, 断章「気晴らし」の紙片のすぐ上部の部分には *Loi figurative* に分類されている断章が記載され, その上には *Morale* のもの, さらに上部 4.5cm ほどについては失われている (P. Ernst, p.443)。最上部の失われた 4.5cm ほどの部分はアルバムに貼られた際に切り落とされた可能性がある。

第 2 に, パスカルの加筆した部分 (Texte 27 を含む) はあるものの, 大部分は, パスカルの常設の秘書の筆になる (Tourneur, 1942, J. Mesnard)。

第 3 に Texte 24 の冒頭には 3 つの送り記号が, さらに Texte 24 が記されている紙 (217 ページ) には, ほかに 3 つ, 合計 6 つ付けられていて, そのうち 4 つが消され, 2 つが残されている。使用されている送り記号は B, C, D で, 5 枚の紙の中でも一番多い。断章「気晴らし」の第 133 ページが次に多く, 使用されている送り記号は C, D で, 4 つ使われ, そのうち 2 つが消去され, 2 つが最後まで生きている。これらのことから, パスカルが 217, 133 ページのテキストの構成をさかんに変更したことが見て取れる。もっとも, この構成の変更は第 3 稿作成の時に行われるのであり, 第 2 稿には関係はない。

b) ここで Texte 24 の Premier jet を引用することにしよう。

Texte 24 (Premier jet)

B Car pour parler selon la uerité des diuerses conditions des hommes
Ceus que nous appelons de grande qualité comme vn surintendant vn chancelier
Vn premier presidant ne sont autre choses que des personnes qui ont des
Le matin vn grand nombre de gens ches heus pour les entretenir de
Divers affaires dés A leur resueil et ne leur laissair pas vne heure en
La iournée pour panser a eus mesmes Et quant ils sont dans la disgrace Et [l']
Qu on les renuois a leurs maisons des champs ou ils ne manquent ny de biens
pour leur nourriture et leurs logemens Ny de domestiques pour les assister
Dans leur besoin ils ne laissent pas d'estre miserables et abandonnes parce que
personne ne les empesche de songer a eus

このテキストの特徴ははじめから送り記号 (Signe renvoyé) B が付けられているところである。すなわち、どこかのテキストから送られてきている。その送り出しの送り記号 (Signe renvoyant) B を見つけることが肝心である。というのも、パスカルは受け手の送り記号 (Signe renvoyé) B を上からインクでクルクルと消しており、テキスト冒頭に加筆修正を加え、ふたたび、送り記号 (Signe renvoyé) B を書き加えている。この2つ目の送り記号 (Signe renvoyé) B は、前頁の欄外左下に加筆された Texte 23 の最後に対応する送り記号 (Signe renvoyant) B を見いだすことが出来るが、しかし、この2つ目の受け手の送り記号 (Signe renvoyé) B を上からインクでクルクルと消している。

ここで肝心なのは、前に明らかにしたように Texte 23 は Texte 25 をコピーしたものであり、第3稿で成立する Texte 23 から第2稿で成立している Texte 24 へとは、テキスト成立の順序から言っても、つながるはずはない。

ところが送り出しの送り記号 (Signe renvoyant) B は5枚の紙には1つしか残されていない。ここで本章第1節の指摘を思い出してほしい。この紙片の各行の最後の文字が紙より飛び出しており、明らかにこの紙片の右端が切り落とされた結果である。われわれの求めている送り記号 (Signe renvoyant) B はこの紙片の右余白にあるはずで、右端が切り落とされた際に、この送り記号もいっしょにカットされてしまったのではないだろうか。なぜなら、この送り記号 (Signe renvoyant) B は、先程も述べたように、最終的には Texte 23 の最後に付け替えられているので、古い送り出しの送り記号 (Signe renvoyant) B はすでに、たとえばインクで上からクルクルと塗りつぶすような仕方、消されて放棄されていたはずだからである。しかも、『パンセ』断章の記されている紙片をアルバムに貼り付ける作業は、出来るだけ効率よく、無駄なスペースを作らずに、行われていったのであるから。

c) 送り記号が見つからない以上、ここでは文のつながりから判断していこう。

まず、一番自然に Texte 24 は Texte 18 にそのままつながっていくという考え方が出来るであろうか。「*mais qu'on juge quel est ce bonheur qui consiste à être divertie de penser à soi*」に対して、「*Car pour parler selon la vérité des diverses conditions des hommes...*」では話題の一貫性がない。

次に、Texte 24 は Texte 18 の最初の2行の後に続くのではないかと考えてみよう。

«Nulle Condition n'est heureuse sans bruit Et sans divertissement¹ Et toute Condition est heureuse tandis qu'on Jouit de quelque divertissement²» と、人間の幸福と人々の身分の間には相関関係はないと断言して、そのすぐあとに «Car pour parler selon la vérité des diverses conditions des hommes...» と続くと考えるのは無理がある。

それに, Texte 18 の放棄のプロセスとしても, パスカルがまず上 2 行を横線で, そして縦線群で全 3 行を削除しているが, これらの横線と縦線の太さは同じに, さらに上 2 行と第 3 行目を分けている比較的短い線の太さも同じに見える。また Texte 16, 17, 18 の筆も太めである。当時は鶯ペンであり, 今日の金属のペン先よりも摩耗が激しいことなどを考慮すると, これは一連の流れで, Texte 18 を書いて, すぐに Texte 18 のまず上 2 行をそして全 3 行を削除したと考えるのが自然である。そしてそのかわりの締めくくりの文章を次のページに常設の秘書に書き取らせることにしたと考えるのが自然ではないだろうか。

Texte 18 が人間の幸福と身分の問題を取り上げていること, そして, Texte 24 もやはり人間の幸福と身分の問題を具体的に論じているので, むしろ, Texte 18 を別の, あえていえば, 反対の視点から書くことにしたと考える方がいいのではないのか。Texte 18 と Texte 24 は同じ問題を別の意見の側から書き直したと言えるのではないか。

このように考えると 209 ページの紙の最後まで書いて次の紙に移るのであるが, この紙 (217 ページ) は前にも指摘したように, 上部が切り取られ, この切り取られた紙片の上部はさらに 3 分割され, 断章「気晴らし」の紙片のすぐ上部の部分には *Loi figurative* に分類されている断章が記載され, その上には *Morale* のもの, さらに上部 4.5cm ほどについては失われていることがわかっている。

断章「気晴らし」の書かれている最上部をよく見ると, まず, パスカルの秘書によって書き取られたテキストが存在し, このテキストの上部余白にパスカル自身の手で加筆がなされている。この上部に存在していた断章の草稿をつなぎ合わせてみると上の断章の文字と断章「気晴らし」にパスカルが加筆した文字が接近しており, これを分けるように 2 つの断章の間に線が引かれていて, この線にそって上下が切り離されている。見るとわかるのであるが, あきらかに, この紙が切られたのは断章「気晴らし」へのパスカルの加筆の後である。

つまり, 209 ページを使い切ったパスカルは, 新しい紙ではなく, 上部三分の一ほど断片的なテキストが書かれている紙に, それらのテキストの下に口述筆記をさせたことになる。

なぜ, 新しい紙を用いなかったのか。パスカルには書き取らせたいことの分量が見えていたからであろうか。しかし, 専属の秘書はかなり書くことになる。用紙の最下部のわずかを除いてこの紙をほぼ使い切ってしまうほどだ。あるいは, たまたま手元にほかに紙がなかったのだろうか。紙は当時は今日とは比べものにならないほど貴重品だったとはいえ, パスカルはかなり贅沢に用紙を使っている。もし, その場になくとも, 秘書がいるのだから, 家の中に紙があるのなら取りに行かせることもできたであろう。ともあれ, 断章「気晴らし」の第 209 ページを書き終わったパスカルは, 上部半分近くまですでに別の断片を書き込んである用紙に書き取らせた。そのとき書き取らせたテキストが Texte 24 (*Premier jet*) である。

この後, このテキストは 2 度の加筆修正を受ける。

d) 第1, 2回目の修正

Texte 24 (Premier jet) はもともと、第209ページのTexte 17からの続きとして成立した。その後、第209ページのTexte 23の成立にともなって、この続きとしてふさわしいように、第1回目の修正を受ける。さらにのちに断章「気晴らし」の草稿第133ページを執筆しながら、この草稿全体の構成を刷新するときに、Texte 24はもう一度修正を受ける。

第1回目の修正

*B Prenez y garde qu est ce autre chose d estre surintendant chancelier
premier presidant sinon d estre en vne condition ou
l on a Le matin vn grand nombre de gens qui uiennent de tous costez ches
[heus] pour ne leur laissair pas vne heure en La iournée
ou Jls puissent panser a eus mesmes Et quant ils sont dans la disgrace
Et Qu on les renuois a leurs maisons des champs ou ils ne manquent
ny de biens Ny de domestiques pour les assister Dans leur besoin
ils ne laissent pas d'estre miserables et abandonnes parce que
personne ne les empesche de songer a eus⁵⁾*

第2回目の加筆・修正

[Texte 28] *D de grande condition qu Jls ont Vn nombre de personne qui les
diuertissent Et qu Jls ont le pouuoir de se maintenir en cet estat. [Texte 24] Prenez y
garde qu est ce autre chose d estre [...]*

第2回目の加筆・修正は、Texte 28の追加である。パスカルは第3稿作成のために、この草稿全体の構成を刷新する。Texte 28は、この時に第133ページの最下部のテキストからTexte 24へとつなげるために書かれた文章である。

第4節 第2稿：2つの結句

ここで再度Texte 18をめぐる問題点をとりあげる。すでに検討したように、パスカルはTexte 18を209ページ最下部に書き、そのあとで、放棄しておそらくは傍らにあった紙、しかもすでに上部を全く別の思索の断章を記録してあった用紙(217ページ)に、Texte 18と同じ問題を別角度から論じる。ただし、ここからは常設の秘書に段落にして3つばかり書き取らせた。そのうちの第1段落の10行(Texte 24)ほどが、断章「気晴らし」の結句である。しかも、この結句は第3稿でも結句として最後におかれている。

Texte 18を書き直したものがTexte 24であるとする筆者の考えが正しいとすれば、Texte 18

は 3 行と短くはあるが、結句といってよい。おそらくは Texte 17 まで書いたところで自分で書くことに限界を感じたパスカルは、この文章を終わらせることを考えて、短い結句で終わらせることを選んだ。

そうすると、次のような解釈をしたくはならないであろうか。すなわち、パスカルは実は 209 ページの最後で 2 稿の筆を置いた。のちになって、Texte 18 を放棄して、217 ページに Texte 24, 25, 26 を付け加え、そのうちの Texte 24 だけが断章「気晴らし」の結句である。筆者もこの可能性も考えた。そして、この解釈が不可とは言えないと考えている。

しかし、この考え方にはあえて組みしない。その理由を述べておく。

この考え方をすることによってなにか新しい視点が開けてくるかと言えば、とくにそうではない。いったんそこで筆をおいて、あらためて、結句だけを入れ替えたということだけである。

これに対し、第 2 稿への改訂をはじめて 209 ページの Texte 17 を書いたところで、自分で書くことに限界を感じたパスカルは、この文章を終わらせることを考えて、短い結句で終わらせることを選んだ。それはスペース的にもふさわしいものであった。Texte 18 をパスカルが書きあげ、そこで断章「気晴らし」の第 2 稿は終わるはずであった。最後の 1 行は «mais qu on Juge quel est ce bonheur qui consiste a estre diuertí de penser a soy» というパスカルらしい警句的でシニカルなすばらしい 1 句である。

しかし、パスカルには、断章「気晴らし」の第 2 稿を書きながら気がついた、どうしても気にかかる新しい考えが一つあった。それは「気晴らし」と「倦怠」に関するものであった。そこで、素早く書き上げた結句を放棄して、常設の秘書に、あらたな結句を、それも、今後来るべき新たな大改訂で第 3 稿を成立させても最後におかれることになる結句を、書き取らせることになる。しかも、そのあとに、第 2 稿 (Premier jet) を執筆中にパスカルがあらたに気がついた「気晴らし」と「倦怠」に関する断章も書き取らせた。そして、パスカルはここで執筆の作業を終了したと推測する。

ここで指摘したいことがある。第 1 に第 2 稿には 2 つの結句があること、第 2 には、初稿にはなかった「倦怠」という概念に出会ったこと。第 2 稿 (Premier jet) を執筆中にパスカルはこの「倦怠」という概念との出会いを持つことになったのである。

第 4 章 Texte 25, 26 について

さて、パスカルは Texte 24 (Premier jet) を書き取らせたところで、この大きな断章「気晴らし」の文章を終わらせ、長めの横線を引いて、さらに「気晴らし」のテーマに関する考察を秘書に筆記させる。それが Texte 25, 26 である。Texte 24, 25, 26 おなじ調子のゆっくりした筆跡で書かれている。このことから、この 3 つのテキストは同じ時期に全部書かれた、すなわち、第 2 稿成立時に書き取られたと考えてよい。

Texte 25 の加筆修正については、すでに Texte 23 の加筆について論じたところで検討した。ここでは最初の状態 (Premier jet) をあげる。Texte 26 との連続性を確認するためである。そのあとに Texte 26 (Premier jet) を引き考察しよう。

Texte 25 (Premier jet)

Le diuertissement est vne chose si necessaire aus gens du monde
 Qu'ils sont miserables sans cela car quant mesmes ils ne panseroient pas aus
 Miseres de leurs Conditions ou ce qui les porte dans l'ennuy ou mesmes
 quant ils n y panseroient pas Et qu'ils n auroit aucun suiet de chagrin
 L'ennuy de son authorité priuée ne laisse pas de sortir du fonds du cœur
 ou il a vne racine naturelle et remplir l'esprit de son venin.

Texte 26 (Premier jet)

Ainsi l'homme est si mal heureux qu'il s'ennuieroit mesmes sans
 Aucune cause d'ennuy Et il est si vain qu'estant plain de miles causes
 d'ennuy la moindre chose comme vn chien vne bale vn lieure suffisent pour
 Le diuertir.

Texte 26 の 2 行目は加筆を受けるが、加筆が行間に 2 段にわたるのは、本断章の Texte 16 にもみられたものの、『パンセ』草稿の中では比較的珍しい。

de sa

^ par l estat {par} {sa} propre complexon

Aucune cause d'ennuy ^ Et il est si vain qu'estant plain de miles causes

この部分は 2 度の修正と読める。以下に字句の変遷を記す。

- (1) Aucune cause d'ennuy *par sa propre complexon* Et il est si vain [...]
- (2) Aucune cause d'ennuy *par l estat de sa propre complexon* Et il est si vain [...]

ほかにも単純な加筆や字句の入れ替えはあるが、問題になるようなものはない。ここで Texte 26 の修正後のテキストを示す。

Texte 26

Ainsi l'homme est si mal heureux qu'il s'ennuieroit mesmes sans Aucune cause

d'ennuy *par sa propre complexon* Et il est si vain qu'estant plain de miles causes
d'ennuy la moindre chose comme *Vn billard Et vne bale qu'Il pousse* suffisent pour
Le diuertir.

ここでは、別の観点から指摘を付け加えておこう。

Texte 25, 26 において、パスカルは「気晴らし」と「倦怠」の関係を述べているが、実はこのテーマは Texte 17 において初めて登場する。すなわち、断章「気晴らし」の初稿ではこの関係は語られていない。断章「気晴らし」の生成の第2段階になって、すなわち、これらのテキスト(17, 25, 26)を書いていて、この関係に気づいたのではないだろうか。

第5章 第2稿の全容

第1節 第2稿の成立過程

第2稿の成立していく過程をここでまとめておこう。断章「気晴らし」は、3枚の紙(R.O. pp. 139, 210, 209)のそれぞれ片面に綴られていく。209ページの第1パラグラフを書いたところで、病弱であったパスカルは、おそらくは疲れ果てて、常設の秘書に書き取りを頼み、8行ばかりの最後の部分を紙の続きに記録させ、そこで執筆をやめた。おそらく、そこで自分の考えていることを言葉にしたからであろう。これが初稿である。初稿の特徴の一つに、「Je」が全面に出てきており、これはプライベートな文章で、晩年のパスカルが企画していた『キリスト教護教論』のために書かれたものでない。

さて、この初稿を改訂する時が来る。どのくらいの時が経ったのであろうか。第2稿以降に成立したテキストのなかにはもはや「Je」は登場せず、文体は明らかに『キリスト教護教論』を意識したものに思われる。そうすると、初稿は『キリスト教護教論』を企画する前にかかれたものと推測したくなる。そして、あとになって、『護教論』を執筆するようになって、この初稿の文章を手直しして『護教論』用に手直ししたと考えたくなる。

どのくらいの時が経ったのか、これは不明であるが、『パンセ』断章の透かしを調べた Pol Ernst (p.276)によると、断章「気晴らし」に使用されている5枚の紙片には、139と217ページが「cadran」の、210, 209, 133ページが「FNPH」の透かしがあるという。そうだとすると、この2つの透かしの紙が同時にパリの家にあった時ということになる。この透かしがそれぞれの紙の出目を物語るとすれば、一つの透かしの紙が、少なくなってきたので、あらたに別の紙(もちろん透かしもかわる)を買い入れたと考えられる。初稿は139, 210, 209ページに書かれており、第2稿が139, 210, 209, 217ページに、第3稿ではあらたに133ページが使われたのであるから、初稿から3稿までとおして「FNPH」の透かしを持った紙が使われていたことになる。すかしと購入時期が一致すると考えれば、初稿から第3稿まで書かれるのに、何年もの期

間を考えるわけには行かない。むしろ比較的短期間で初稿から第3稿まで発展させていったと考えた方がよさそうである。

第2稿が書かれるときが来た。パスカルはこの断章が書かれている3枚の紙を取り出し、第209ページに書かれている初稿結論部最後の数語を横線で消し、そして、その語を修正することなくその語を含んでいる Texte 14 すべてを、さらに Texte 13 を縦線で放棄し、第210ページの最下部 Texte10 も放棄して、その直前にある Texte 9 最後尾に、送り記号 (Signe renvoyant) A を付け、第209ページに戻り、今、放棄したばかりの Texte14 の最後に、送り記号 A (Signe renvoyé) を書き加え、Texte 15 を書き始める。結果として、パスカルは Texte10, 13, 14 (11, 12 は第210ページ欄外余白のメモ) という一連の文章をそっくり放棄して、Texte 9 から15へとジャンプして、Texte 15, 16, 17, 18 と書き継ぐ。Texte 18 は3行と短くはあるが、結句である。おそらくは Texte 17 まで書いたところで自分で書くことに限界を感じたパスカルは、この文章を終わらせることを考えて、短い結句で終わらせることを選んだ。しかし、この考えをあらため、常設の秘書に続きを書き取らせることにして、Texte 18 を縦線群で放棄し、傍らにあったすでに上部を全く別の思索の断章を記録してあった紙に、長い横線を引いて、その下に Texte 24 を書き取らせた。これが第2稿の長い結句である。

ここに、第2稿が書き上がる。しかし、第2稿の中で「気晴らし」と「倦怠」の関係をみつけたパスカルは、第2稿の下に、この関係を言葉にしておきたいと考え、Texte 25, 26 を書き取らせ、そこで執筆活動を停止する。

草稿上に残されていた痕跡をもとに第2稿の成立過程のほぼ全容が解明できたと見えよう。

注

- 1) いかなるテキストであれ、そのテキストがはじめて書かれた状態を本稿では「Premier jet」と呼ぶことにする。これは「初稿」という呼び方を、断章「気晴らし」のはじめて書かれたテキストの全体にもつぱら適用して、両者を区別し、混乱を避けるためである。
- 2) この加筆については、論者は2009年5月23日のパスカル研究会第119回(初稿について)、120回例会(第2稿について)、第2回パスカル草稿研究会(第3稿から最後の稿へ向けて)の場で合計3度にわたって発表をし、多くの参加者の皆さんからご意見、ご批判をいただいた。なかでも、開催校の望月ゆか氏からは、研究会のあと、メールにて、貴重な指摘をいただいた。それをうけて、論者の考えを若干修正するのを感じた。本文中に修正を明らかにしたい。このことをここに記し、望月氏をはじめ論者の発表をお聞きいただき、様々にご意見をいただいた参加者の皆様に感謝の意を表明したい。また、この研究発表には京都産業大学より出張費などの支援を得て実現できたことも、謝して記しておく。
- 3) ジャン・メナール氏によれば、パスカル常設の秘書の仕事は、『護教論』執筆に関してはパスカルが述べたことを書き取るもののほかに、すでにあるテキストを書き写すことにあったという(03.09.2009 ソルボンヌにおける私的面会の話の中で。なお、この面談も本学の総合研究支援制度によって実現したものである)。
- 4) 209ページの Texte14, 5行目行頭余白の「La possession」にも同様の指摘が出来そうである。

- 5) このテキストは最終のものであって、すべての変更が第1回目のものであるという確たる証拠はない。ただし、「*Prenez y garde qu est ce autre chose d estre surintendant chancelier premier president sinon d estre en vne condition ou l on a Le matin vn grand nombre de gens qui uiennent de tous costez ches [heus]*」までの変更は第1回目の修正と言ってよいだろう。パスカルは修正する語句・文の上部余白に修正する習性がある、または、そのように意識的にそうしているので、「*Prenez y garde qu est ce autre chose d estre*」は「Car pour parler selon la uerité des diuerses conditions des hommes」という導入のかわりであるが、修正されている余白からみるとさらに「*Ceus que nous appelons de grande qualité comme vn*」までの文の修正と考えるのが妥当である。

参考文献

A. Manuscrits :

1. Bibliothèque Nationale, ms. fonds fr. 9202 (Recueil original)
 2. B.N., ms. fonds fr. 9203 (Première copie)
 3. B.N., ms. fonds fr. 12449 (Seconde copie)
- B. Fac-similés : Original des Pensées de Pascal. Fac-similé du manuscrit 9202 de la B.N. Texte imprimé en regard et notes par Léon Brunschvicg, Hachette, 1905.
- Discours de la condition de l'homme, ce qui reste du ms, en reproduction phototypique et restitution par P.-L. Couchoud, Albin Michel, 1948.

C. Éditions:

- “Les Pensées de Pascal”, éd. Port-Royal, 1678, Guillaume Desprez.
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Condorcet, 1776, Londres.
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Bossut, 1779, Detune Œuvres, t. II
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Faugère, 1844, Andrieux.
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Havet, 1852, Dezobry et Magdeleine.
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Molinier, 1877-79, Alphonse Lemerre.
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Michaut, 1896, Librairie de l'Université
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Brunschvicg, 1904, Hachette.
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Chevalier, 1926, Gabalda.
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Strowski, 1931, Ollendorff (Œuvres complètes)
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Dedieu, 1937, Librairie l'École.
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Tourneur, 1942, Vrin.
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Lafuma, 1951, Ed., du Luxembourg
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Chevalier, 1954, Pléiade, Gallimard
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Tourneur-Anzieu, 1960, Ed. de Cluny
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Lafuma, 1963, Seuil (Œuvres complètes)
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Descotes, 1973, Garnier-Flammarion
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Sellier, 1976, Mercure de France
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Sellier, 1991, Classiques Garnier
- “Les Pensées de Pascal”, éd. Le Guern, 2000, Pléiade, Gallimard

D. Divertissement に関する論文

Michel Le Guern, Pascal au travail, La composition du fragment sur le Divertissement, in REVUE DE L'UNIVERSITE D'OTTAWA, vol. XXXVI, no. 2, 1966

湊野正満 «Misère de l'homme» から «Divertissement» へ in 仏文研究, vol. VIII, 1974

E. 『パンセ』草稿の複読法に関するもの

Yoichi MAEDA, *Le premier jet du fragment pascalien sur les deux Infinis*, in Études de langue et littérature françaises, No.4 白水社, 1964 (1965年に Société des Amis de Montaigne の Bulletin 1-3月号に再掲載されている)

Jean Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, S.E.D.E.S, Paris, 1976
前田陽一 『パスカル「パンセ」注解』第1巻, 岩波書店, 1980

The second stage of the fragment “Divertissement” of Pascal’s *Pensées*.

Masamitsu HORINO

Abstract

On the Manuscript of the fragment “Divertissement” of Pascal’s *Pensées*, we have found that the philosopher had at first written more than 2 pages’ private text entitled “Misère de l’homme”, at the seconde version, after having deleted its conclusion, he rewrote the new version with the same contents as the former conclusion and added new thinkings about the relation of human’s misery, of his distraction and of ennui for explaining human beings’ contradictory and inexplicable acts. He prepared for developing this text from a private composition into a writing for the Apologia. One more time, in order to complete this writing, Pascal took these pages, adding many more lines and putting all the pages in a new order.

In this article, we examine the second stage of Pascal’s creation of his *Pensées*. We analyse the third & fourth pages of Manuscript of the fragment and try to focus on all the lines added in this step to find the secret of Pascal’s creation of his thinking.

Keywords : Pascal, *Pensées*, «Divertissement», autographe manuscript,
«Double lecture» of M. Yoichi MAEDA (named by M. Jean Mesnard)

断章「気晴らし」(fr. 168-136)

写真版及び Copies figurées

R. O. pp. 209, 217

『パンセ』 草稿転写凡例

パスカルは自分のために編み出した原稿の推敲法を守って文章を書いていた。初稿執筆時には用紙には用紙の上下と左右の片側（場合によると両側）に余白をとり、また行間も1行分あけ（ダブルスペース、一行おき）、この余白をまったく使わずに、はじめに頭の中にあつた考えを全部書いてしまう。普通の間は、ここで見直して加筆訂正するが、パスカルは、書いたばかりの文章をかなりの間見ないでしまつておいて、自分の頭からはじめの考えが完全に消えてしまつたのち、ふたたび取り上げ、修正の手を加える。この時には、空いている用紙の上下左右の余白、行間をフルに使つて徹底的に修正する。「パスカルはこのような方針を組織的に厳格に適用した」という。

1) 綴りは現代の正書法に改めず、パスカルの記した綴りを尊重した。「現代のものと著しく異なるものであつても、それをいちいち断ることはしなかつた。

例 Le plaisir de le monst^rer aux autres

なお、209ページテキスト14に見られる chercheint は、書き取つた人物の書きぐせ

2) 大文字、小文字の使用はパスカルのそれに準じた。 例 entendre la Nature

3) パスカルの綴りのすべてを書かず、語尾を跳ね上げるなど、いわば略号のようなものを使用する場面があるが、これは、パスカル草稿研究の慣例に従つて表記した。

例 pour → p^r. Nous → N^s, 語尾の ment → m^t など

4) ここでは用紙の大部分を使つて1行おきにかかれていた部分には通常の文字で、これに加筆されているテキストはイタリックで区別した。

このイタリックの文字に行間に更に加筆があるが、これは一回り小さいイタリックの文字で印刷され、区別されている。

例 grandeur de la nostre premiere

qui reste de la ^ nature

また、209ページのテキスト14及び217ページに存在する他人の手で書き取られたものは、ゴチック体の活字で区別する。

例 Ainsi on se prend mal pour les blasmer

5) 上下左右の余白にあるテキストは、加筆されたものであり、イタリック体の活字で区別する。

6) 横線で放棄されている文字については、書いてすぐに放棄されたものはその文字をかき括弧 [] で、また時を改めて加筆修正しながら放棄されたものはその文字を中括弧 { } でくくり区別した。ただしパラグラフ全体を縦線などで放棄しているような場合は、そのまま縦線などで示した。

7) 一度書いた文字の上にそのまま他の文字を重ねて書いた場合、はじめに書いた文字を () に入れ、重ねられている文字をそのあとにスペースを置かずに記した。 例 (de)le

8) なんらかの理由で筆者が補つたものは [] の括弧でそれを区別している。

9) 活字転写版 (Copie figurée) には、本文理解を助けるために反転文字で **Texte 15** のように、テキストの番号を付加してある。断るまでもないが、これは筆者が追加したものである。

自筆の草稿を活字に転写するにあたり、次の写真版、写本と刊本を参照したが、その異同をいちいち記すことは煩雑になりすぎるのでしなかつた。

I 断章「気晴らし」の自筆の草稿写真集

- 1) Original des Pensées de Pascal, Fac-Simile du Manuscrit 9202 (fonds français) de la Bibliothèque Nationale (Bibliothèque Nationale 作成の Microfilm)
- 2) Brunschwig : Original des Pensées de Pascal, Fac-Simile du Manuscrit 9202 (fonds français) de la Bibliothèque Nationale [臨川書店の複製版]
- 3) Couchoud : Discours de la Condition de l'homme

II 断章「気晴らし」の写本 [Bibliothèque Nationale いずれも作成の Microfilm]

- 1) La Première Copie des Pensées, Bibliothèque Nationale, fonds français no.9203
- 2) La Seconde Copie des Pensées les pièces reliées avec elle, Bibliothèque Nationale, fonds français no.12449

III 『パンセ』 刊本

- 1) P. Faugère : Pensées, Fragments et Lettres de Blaise Pascal, Paris, Andrieux, 1844
- 2) A. Molinier : Les Pensées de Blaise Pascal, Paris, Alphonse Lemerre, 1877
- 3) G. Michaut : Les Pensées de Pascal, Fribourg, Librairie de L'Université, 1896
- 4) Brunschwig : Pensées de Blaise Pascal, Paris, Hachette, 1904
- 5) Tournour : Pensées de Blaise Pascal, Edition Paléographique, Paris, Vrin, 1942
- 6) Tournour, Anzieu : Blaise Pascal Pensées, Paris Almand Colin, 1960
- 7) Sellier : Pascal Pensées, (Edition Classique Garnier) Paris, Bordas, 1991

(A)

Texte 19

La Vanité
le plaisir de
la monstre aux
autres

Texte 13

conseiller d'auoir une condition toute heureuse et laqu(ill)elle (Jl) puisse
considerer sans y trouver sujet d'affliction. [C est luy conseil]

[Ce n est donc pas entendre la Nature.]

aussi les hommes (sen)qui sentent Naturellem' leur condition [n eui]

n eui'tent rien tant que le repos, Jl n y a rien qu Jls ne fassent p' chercher

le trouble, [ce n est pas qu Jls n ayent Vn Instinct [qui les] qui leur]

[fait connoistré que la Vraye beaulté]

Texte 14

Ainsi on se prent mal pour les blasmer [mais on a quelque raisn en ce que]

[Les hommes eux] leur faute n'est pas en ce qu'ils cherchent [(de)le]

[Diuertissement] [empesch] [Et] le tumulte s ils ne le cherchoint que comme

Vn diuertissent mais le mal est qu ils [ne] le recherchent comme si

La possession Des choses qu ils recherchent les deuoit rendre veritablement heureux

Et c est en quoy on a raison d accuser leur recherche de uanité de sorte

qu'en tout cela et ceus qui blasment et ceus qui sont blasmes n'entendent

Texte 15 Et Ainsy

{ La Veritable nature de } { l'homme. Car } quand on leur reproche que ce qu Jls

Texte 20

La dance
Il faut bien
penser ou
l on mettra
[On] ses pieds

Texte 21

le gentilhomme
croit sincerem'
que la chasse est
Vn plaisir grand Et
Vn plaisir Royal
mais son piqueur n est pas
de ce sentim' la

ne se connoissent pas eux mesmes, Jls

Texte 22 +++ s imaginent que s Jls auoyent obtenu cette charge Jls se reposeroient

ensuite avec plaisir

Et ne sentent pas [que]

la nature Insatiable de

la Cupidité, Jls croyent

chercher sincerem' le

repos Et ne cherchent

en effect que l agitation.

Car

Texte 23 +++ ou l on pense aux

miseres qu on a ou à celles

qui nous menacent Et quand

on se uerroit mesme assez

a l abry de toutes parts l enmy

de son authorité priuée ne

laisseroit pas de sortir du fond du

Cœur ou Jl a des racines

naturelles. Et de remplir l esprit

de son Venin. B

Texte 28

D de grande condition qu'ils ont Vn nombre de personnes qui les diuertissent Et qu'ils ont le pouuoir de se maintenir en cet estat.

Texte 24
{ B }

{Car pour parler selon la verité des diuises conditions des hommes}

Prenez y garde qu'est ce autre chose d'estre
{Ceus} {que nous appelons de grande qualité comme vn} surintendant {vn} chancelier

{Vn} premier presidant {ne sont autre choses que des personnes qui ont des

ou l'on a
qui viennent de tous costez

sinon d'estre en Le matin vn grand nombre de gens ches {heus} {pour les entretenir de}

pour

{Divers affaires des A leur resueil et} ne leur laissair pas vne heure en

ou'ils puissent

La iournée {pour} panser a eus mesmes Et quant ils sont dans la disgrace Et [I]

Qu'on les renuoie a leurs maisons des champs ou ils ne manquent ny de biens

{pour leur nourriture et} {leurs logemens} Ny de domestiques pour les assister

Dans leur besoin ils ne laissent pas d'estre miserables et abandonnes parce que

personne ne les empesche de songer a eus

Texte 25

Le diuertissement est vne chose si nécessaire aus gens du monde

sans

{ou ils parsent} *tantost vy accident leur arrive tantost*

Qu'ils sont miserables {en} cela {car quant mesmes ils ne panseroient pas aus}

a l'ux} ceus *qui leur pouuent arriuer*

Jls pensent {Miseres de leurs Conditions} {ou ce qu'ils porte dans l'ennuy} qu'ils mesmes

quant ils n'y panseroient pas Et qu'ils n'auroit aucun suieit de chagrin

L'ennuy de son auctorité priuée ne laisse pas de sortir du fonds du cœur

tout

[C] ou il a vne racine naturelle et remplit l'espyit de son veijin.

B**Texte 26**

Ainsi l'homme est si mal heureux qu'il s'ennuieroit mesmes sans

de sa

par l'estat {par} {sa} *propre complexion*

Aucune cause d'ennuy Et il est si vain qu'estant plain de miles causes

Vn billard Et

qu'il pousse

d'ennuy la moindre chose comme {vn chien} vne bale {vn lieure} suffisent pour

Texte 27

Le diuertir. {C} {D ou vient} que cet homme qui a perdu son fils vnique depuis peu

de mois, Et qui est[oit dans] accablé de procez [Et] de querelles Et de tant d'affaires

Imporantres qui le rendoyent tantost si chagrin n'y pense plus a present, ne Vous en estonnez

pas, Jls est tout occupé a sauoir par ou passera ce sanglier que ses chiens poursuient C